

# 新型コロナウイルス後遺症の治療効果

新型コロナウイルスに感染したあと、全身の倦怠(けんたい)感などさまざまな症状が続くコロナ後遺症。確立した治療法がなく手探りの状態が続いてきました。いま、耳鼻咽喉科などで行う上咽頭擦過(じょういんとくさくか)療法(EAT)、Bスポット療法ともいう)の高い治療効果が注目されています。(西口友紀恵)

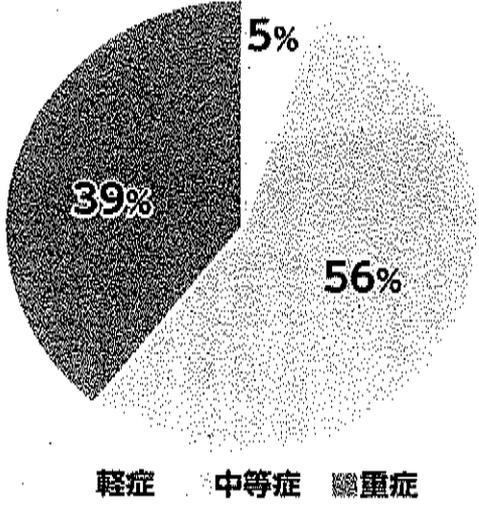
## ほぼ全員に炎症

福岡市の今井一彰さん



今井一彰・みらいクリニック院長(提供写真)

コロナ後遺症上咽頭炎重症度割合  
(2020年10月から21年9月11日)  
(まで。PCR陽性患者のみ85人)



# 上咽頭擦過療法に注目

(みらいクリニック院長)は2月にコロナ後遺症外来を開設。「コロナ後遺症の患者のほぼ全員に上咽頭の炎症がある」と話します。これまでに各地から受診した患者180人にEATを行ってききました。

患者の平均年齢は36歳。40代までで8割を占めます。約4割が軽度の慢性上咽頭炎です。

「第5波を受けて8月末から患者が増えました。が、10月半ばすぎから落ち着いて、いまは1日15〜20人を診察しています。後遺症のことが知られるようになり、多くが発症からほぼ2カ月以内に受診し治療を始めているので、比較的軽症の人が増えた」と話します。

EATは1人に週1回実施。倦怠感や思考力が低下するブレインフォグの症状は、4〜5回のEATで5割の人が、およそ10回で7〜8割の人が改善するよう

になってきたと話します。「症例が蓄積してきた9月ごろから、患者さんに『おそろしく辛い経過をたどって治っていく』とお伝えできるようになった」と手ごたえを語ります。嗅覚障害だけの場合は、EATに加えて最近米国の論文で報告されたステロイドの点鼻や鼻うがいを勧め、効果が出ているといいます。

一方で、EATでなかなか改善が見られない人が2割いて、その治療は今後の課題だと指摘。「悪い面だけでなく、良くなっている部分に目を向けてもらえるよう言葉かけやメンタル面のサポートを心がけています」

## 対応の大原則は

昨年10月から東京都渋谷区で後遺症の専門外来を開



平畑光一・ヒラハタククリニック院長

き、オンライン診療を含めて約3千人の診療を行ってきた平畑光一さん(ヒラハタククリニック院長)もEATの治療効果を実感しています。9月に今井さんと一緒に学会発表を行いました。

対応の大原則は「なるべくやることをしない」。体にかかる負担を減らして倦怠感が出ないように、いかにその範囲を狭めて生活するかが大事」としたうえで、「働けないほど重症の患者の約7割が、EATと漢方やアミノ酸などを組み合わせた治療で明らかに改善している」と話します。

「EATが劇的に効く人も多くいます。医療保険がきいて安価で安全に受けられ、効果がある。今はメインの治療法という感じですよ」と平畑さん。「私は内科医なので、ほぼ全ての患者さんに耳鼻科で必ずチャレンジしてみてくださいと伝えています」

(EATを行っている耳鼻咽喉科などは、日本病巣疾患研究会のホームページで紹介)